三版

明治卅六年四月二日第三種郵便物認可　毎月一回二日發行

堺枯川編輯

家庭雜誌

第三號

明治三十六年六月二日發行

新天地（漫吟、不二彥）……一
隅田川邊の好家庭……一
ワシントン及其母（肖像）……一六
鼠の失策（滑稽畫）……一七
偶感……一八
　蝸牛と猫
　新天一
　理想の美人
　子供預り所
　緣日の植木と大山大川
　地圖を掛けよ
　美しざかり。動きざかり
讀者の顧問……二〇
　目下の地者に對する呼び方
　學資、養子、隱居
樂しき生活……二二
　廿五人の孫（宮本新藏君）
　爺婆の心配（大磯の病人）
結婚離婚の統計……二四
天文の話……二六
家庭文庫……二八
動物虐待防止會記事……三〇
家庭の消息……三一
匆々一筆……三二
本社取次書籍目錄……三二

由分社

東京市京橋區新湊町一丁目十七番地

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

堺枯川著

家庭の新風味

全六册合本

著者は此書が多くの新婚の人に讀まれんことを望む。

著者は此書が多くの將に結婚せんとする人に讀まれんことを望む。

著者は又此書が多くの中年の人及び老年の人に讀まれんことを望む。

要するに著者は此書が多くの家庭文庫に備へられんことを望む者である。

赤表紙合本 全一册 割引價金一圓 郵稅當方持

取次所 本郷二丁目四番地 **由分社**

▲定價 一册六錢、半年分卅二錢、一年分六十錢。

▲郵稅 總べて當方の持の事。

▲注文 總べて前金の事。

▲爲替 本郷二丁目郵便受取所御指定の事。

▲郵券 にて御送金の場合は總べて五厘切手にて一割増の事。

▲前金の切れたる時 は帶封を朱書にして御注意致すべきに依り直ちに前金御拂込を乞ふ

發行所 東京市京橋區新湊町一丁目十七番地 由分社

大賣捌所
東京神田表神保町 上田屋
東京神田裏神保町 東京堂
東京京橋鎗屋町 良明堂
東京銀座四丁目 東海堂
東京京橋鎗屋町 北隆館

印刷所 東京市京橋區日吉町十番地 近藤商店

明治三十六年四月廿八日印刷
明治三十六年五月一日發行
同 卅六年十一月廿七日再版發行

發行兼編輯人 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七百三十八番地 堺利彥

印刷人 東京市京橋區日吉町十番地 中村彌助

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新天地

不二彦

美しき日本島、
櫻の都、若葉の村。
我れ今こゝに住めれども、
世界は廣し、土地多し、
炎天の下、雪の中、
海越えて更に海あり、
山越えて更に山あり、
山にも海にも我れ行かん。
よし山に花は無くとも、
よし海に月は無くとも、
我れに我が妻あり子あり。
一家相携へて行く所、
夫婦親子樂しんで住む所、
世はとこしへに春の光、
地は總べて是れ我が故郷。
そこより日本の島を望まば、
彼れの櫻、我れの財、
彼れの若葉、我れの富、
相對す我が新天地、
美しき我が新天地。

隅田川邊の好家庭

△佐々熊太郎氏

東京葉煙草專賣支局長佐々熊太郎氏は一風ある人物で、其細君も亦頗る賢婦人で、其家庭の有樣は實に敬服すべき者であるとは、此雜誌發行前において我輩の聞いて居た所である。それで是非一度佐々氏を訪問して、其家庭の美を見せて貰つて、其記事を以つて第一號の紙上を飾りたいと思うて居たが、丁度其頃、佐々夫人に六人目のお子が生れかけて居ると云ふ事で、兎も角も其お產の濟むまでと遠慮して、空しく第一號、二號の發行期日を過した。それから安產の報知にも接した後、本社の名譽社友たる斯波貞吉君と共に、五月三日の日曜の早朝に、二臺の自轉車を走らせて、初めて佐々氏の家を訪問した。斯波君は年來佐々氏と懇意の間柄で、それで今度我輩を紹介して呉れられたのである。

△佐々氏の家の位置

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

佐々氏の家は專賣支局の官舍で、專賣支局は淺草の元の藏屋敷で、藏屋敷は隅田川の流れに沿うて居る。先づ支局の門をはいつて行くと、幾戸前ともなく立並んで居る白壁作りの藏が目につく。昔幕府の米を入れた其藏に、今は葉煙草がはいつて居るのである。それから其白壁作りの藏のまはりには、一面に青草がのびて居て、其青草の間には黄金色の蒲公英が夥たしく咲いて居る。此鼠色の間を拔けて、隅田川からの横堀に沿うて行くと、ズット先の方に一棟の家がある。それが即ち佐々局長の官舍である。官舍とは云へ、元は人足部屋か何かであつたのを、佐々氏の意匠で住宅に拵へなほしたと云ふ事である。家の位置や間取がハッキりと頭にはいつてからで無くては、何かの話が十分に腦に落ちぬものであるから、チヨツト大畧の圖をこゝに記しておく。文章と圖と普く照らしあはせて御讀みつゞけを乞ふ。

△食堂内の光景

予は先づ玄關に音づれて、玄關から廊下を通つて食堂に案内せられた。食堂と云ふのは十五疊敷ばかりの西洋間である。西洋間と云つても決して華々しい者では無く、床は板張のまゝで敷物も無いのである。然し東南の二方がスツカリ硝子窓になつて居るので、光線は十分にはいつて室内が晴々として居る。先づ目につくのは、大小樣々の椅子に取圍まれたる長方形の食卓(圖のロの字の所)で、其中央にはズンドの花活に菖蒲か何かゞ姿よく活けられて、其ズンドの裾には又、孟宗竹の一節を横にして其中程をくりあけた花活に、ゲンゲとタンポヽとが恰好よく活けてある（後に聞けば、是れは子達の一人の意匠だと云ふ事）。それから東南の隅の窓に沿うてテーブルが一脚おいてある（圖のイの字の所）。其南側には籐の長椅子が据ゑられて、東側は窓に突きつけられて、西北の兩側には又二三脚の椅子が据ゑてある。椅子もテーブルも總べて質素な物ばかりである。其外、室内で目につく物は、西側の壁の中央に（食卓の中心とも云ふべき大きな腕掛椅子の眞上の所に）掛けられてあるボン／＼時計と、其右手

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

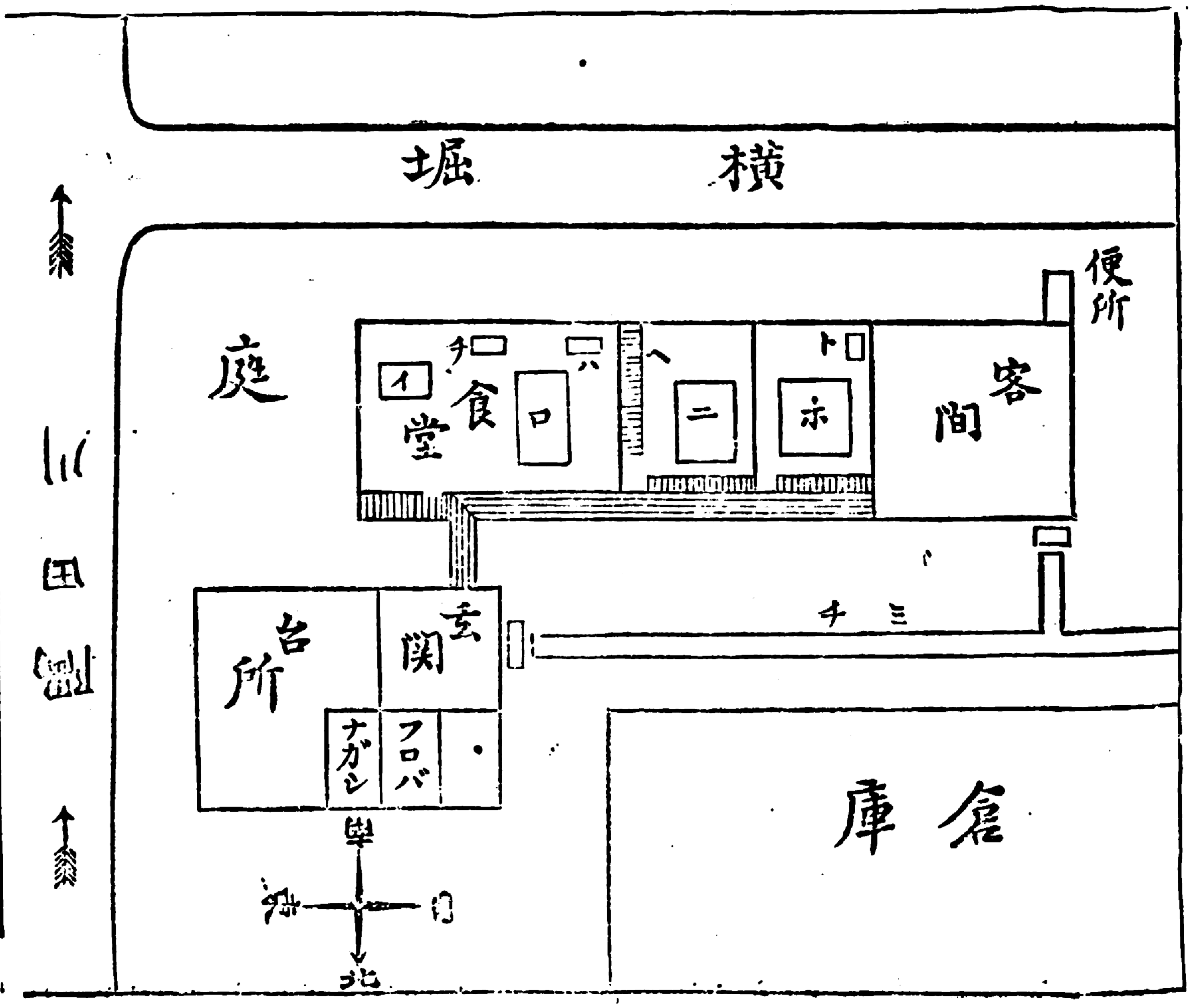
に掛けられてある日本地圖と、其左手の床に置かれてある小さなテーブルとてある。此テーブルの上には硯、筆、墨などが見えて居る。

△佐々氏の風采

予等は先づイの字のテーブルの前に腰かけた。籐の長椅子に座を占めて居る主人の佐々氏は、色の小黒い、中肉中セイの、さも健康らしい、四十歳ばかりの人で、頭は五分刈のグル／＼坊主、稍まばらな黒い顋髯も餘り手を入れたものとは見えぬ。着物はフランネルの筒袖に金巾の兵兒帶と云ふ作りてある。挨拶も濟んで窓から外を見渡せば、南には横堀、東には大川。堀の彼方には倉が見える、青草が見える、蒲公英が見える、杉や榎の大木も見えて居る。大川の向ふ岸には誰やらの大きな邸を中心として、家や森やが一列に見えて居る。

△佐々夫人、春風黨、秋風黨

程なく佐々夫人がそこに見えた。夫人は大柄の、サモ確りした人で、顔にこそはマダ少し血色が足らねど



も、産後僅に三十何日しか立たぬと云ふに、モウ少しも疲勞の躰が見えて居らぬ。髪は束髪でゞもあつたらうか、目に立たぬ結ひ方で、身にはカスリの被布の様な物を着て居られた。大概、家持の善い細君とか、シャリの善い女房とか云へば、勿論、氣は利いて利口ではあるが、兎角どこやら情の足らぬ、懐かしげのない人が多いのであるが、佐々夫人は又意外にも愛嬌のある、親みやすい、にこやかな人である。此序にチョット思ひだした事があるから記しておく。數年前、我聲が或處で毎日出會ふ友人仲間で、お互ひの細君連やら其外世間の細君達の事について様々と話して居る中、「凡そ細君を二種に別つ、一を春風黨と云ひ、他を秋風黨と云ふ」などゝ云ひだして、とう〳〵それが通り言葉になつて、「アノ人は大の春風黨で一名を泰然派と云ふのだ」とか、「アノ人は少し秋風黨で又の名は肅殺派と云ふのだ」とか、一時茶話の種になつて居た。尤も、右の言葉の中にも自然現はれて居る如く、春風、秋風、共に善い意味にも悪い意味にも用ゐられて居たのである。それで是れは一時の茶話とは云ふものゝ、大躰においてドコにも適用の出來る分類の仕方で、其後も我聲は多くの細君達を見る毎に、必ず此言葉を思ひ出すのである。扨佐々夫人に立ちもどつて考へるに、夫人は實に春風黨兼秋風黨と云ふべき人である。其の人に接すると溫和で、愛嬌のある所は春風黨で、其の家持の善く、シッカリとして居る所は秋風黨である。兩黨の長所を兼ね備へて、兩黨の短所を持たぬ人であらうかと思ふ。

△苦しまぎれの思ひつき

それからイの字のテーブルを圍んで談話が始まつた佐々氏の傍には、其條の長椅子の上に四つばかりになる男の子が乘つて居る。夫人は赤ン坊を抱いて其側の椅子に腰かけて居られる。赤ン坊は六人の子供の中のタッタ一人の女の子で、丁度本誌第二號の家庭の消息の中にあつた言葉のように、松の林に櫻の一本と云ふのである。

佐々氏及び夫人の言葉に依れば、氏の家の改革は、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

總べて「節儉の爲め、苦しまぎれの思ひつき」で、又「手の掛からぬやうに、手の掛からぬやうにとの工夫」であるとの事。世には隨分善く整頓した家庭もあるであらうが、金が多くて子の少い家庭では、我々の學ぶ所は殆んど無いと云つても善い。佐々氏が專賣支局長として幾許の俸給を得られるかは我輩の知らぬ所であるが、兎も角も中等の官吏として六人の子を育てるのは、決してラクな事では無い。「苦しまぎれの思ひつき」と云ふ言葉も決して謙遜ばかりではあるまいと思ふ。それでこそ我々は氏の家庭について學ぶ所があるのである。又、夫人の話に、「私が五人六人の子供をかゝえて居ながら、女中と云へば御覽の通りの小女を一人おいたきりで、それで案外ラクにして居るやうに見えると皆樣が仰しやりますが、そこが萬事手の掛からぬやうにと工夫して居るからで御座います」との事。予は「如何にも」と此言葉に敬服した。見れば女中と云ふのは十四五ばかりの筒袖の娘である。此娘一人を相手にして、五人の腕白と一人の乳呑との世話をして、聞けば其五人の散髮まで皆おつかさんの手に成ると云ふのであるが、どうしてマアそれほどに善く手が行屆く事であらうか。それが皆工夫の爲であるとすれば、工夫の無い人の愚かさが餘りと云へば甚だしい譯である。世には隨分、タツタ一人の子を持てあまして、女中や乳母やと騒ぐ人もある。又それほどで無いにしても、「何分子供が多いので」とか、「子供が多くては何もかも仕方が無い」とか、一切の責を子供の上に投げかけて、そうして一家不整理の罪を免れようとして居る細君も決して少い事では無い。願はくばそれらの人々、少しく佐々夫人に耻ぢたまへ。佐々夫人の話を聞き、佐々夫人の家政を見る時は、子供の多いと云ふ事はモウ決して何等の言譯にもなる者では無い。現に佐々夫人は六人の子供を持ちながら、我々が訪問すればユル〳〵と話もして、子供を叱る聲も聞かせず、女中を追ひつかふ聲も聞かせず、そうして其整頓したる家内中を臺所から押入の隅まで案内して我々に見せ、そうして其間に晝飯の御馳走がチヤアンと出來て居たのであ

る。是れより家內中巡覽の次第を記して見よう。

△寢　室

我々は先づ食堂の次の間へ案內せられた。是れは夫婦の寢室である。床は矢張り板張で、ニの字の所が寐臺になつて居る。寐臺は二尺ばかりの高さで、其上には疊が敷いてある。夜具は總べて白布に包まれて居る。此室には鏡などもあつて夫人の化粧室をも兼ねて居る。それから又、への字の所に押入の樣なものがあつて、そこには佐々氏の身につける物が一切揃へてある。洋服やシャツやは整然として壁の釘に掛かつて居る、帽や、時計や、其外細々した物は皆棚の上にチャンと並んで居る。北側の押入は多分夫人の衣類や何かの入れ所であらう。

次に我々は子達の寢室に案內せられた。ホの字の所が即ち五人の子供の共同の寐床である。少し横幅を廣くした寐臺で、それに皆並んで寐るのと見える。子供を親の側に寐せずに、寢室を別にしてやる事は、西洋一般の風であるが、是れは子供に自治心を起させる爲

に甚だ善い事であると思ふ。子供は子供で一組になつて一室を占領して、兄弟の間に相談もし、助けあひもして、總べて彼等だけで室內の整頓をして行く事になれば、彼等は他日自ら家を持つ時の爲に其練習をする事にもなるのである。扨此室のトの字の所に五六段ばかりの棚があつて、是れが子達の學校道具や何かの置き處であるが、其棚の使ひ方について予の殊に敬服した事がある。と云つて何も不思議な事では無く、只其五六段の棚を兄弟の子達が年齡順に依つて使ふと云ふ事である。年齡順に依るのは即ち脊の高さの順に依るので、一番脊の高い者が一番上の高い棚を使ひ、二番目の人が二番目の棚を使ひ、三番目の人が三番目の棚を使ふのである。チョットした事ながら、そこに秩序あり、整頓あり、趣味あり、是れも得がたき工夫の一つであらうと思ふ。それから此室の北側の押入をあけて見せられたが、そこには子達の着る物が入れてあつて、殊に目についたのは、シャツ、靴下、ズボン下などの悉くサッパリと洗濯したのを、別々に銘々の分

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を重ねて、右から左にチヤンと順に並べてある事てあつた。

△客　間

次に我々は客間に案内せられた。こゝには相應の裝飾があつて、始めて謂はゆる西洋間らしく感じた。然し、此家においては、此室は餘り有用の者では無く、改まつた人の來た時などにタマに使ふばかりて、大概は食堂を以つて應接間を兼ねて居るとの事てある。されば此室は此家の特色を示した者ては無く、寧ろ他の室と調和せぬ趣きがある。それから又、稍美しく飾られたる此室が餘り此家において尊ばれぬ證據には、此室の片隅に大きな長持の樣な物が置いてあり、又裁縫のミシンが置いてある。平生餘り使はぬから自然物置の形になつたのてはあるまいかと思はれた。

△臺所、風呂場

次に我々は臺所に案内せられた。臺所と玄關とには疊が敷かれてあるが、臺所の窓はヤハリ西洋風になつて居る。そして室内には殆んど一物も置いてなく、そこには何の趣味も無いが、一たび棚の上と押入の中とを見る時には、忽ち其秩序と整頓とに驚かされてしまふ。多くの家では、汚い物は押入の隅におしこんで匿しておく、押入の中は亂雜でも戶（或は襖）を締めておけば人には見えぬ、と云ふ風であるが、佐々夫人の主義としては、押入の中は殊に片づけて、何でも一目に見える樣にして、細々した分りにくい物は部類分をして、そして是れは何、是れは何と張札をしておくと云ふのである。それで每晩寐る前には、必ず女中に一切の物を片づけさせて、押入の戶をあけさせておいて、そして自ら一じゆん見廻りをするとの事てある。此室において特に我輩の目を引いたのは、或る棚の上に幾つも幾つも奇麗にチヤアンと積み重ねられた疊紙の包みてあつた。其疊紙の包みには一々例の張札がしてあつて、それを一々讀んでは見なんだが、包みの中の物の少しばかりづゝ見えて居た所から察するに、フランネルの截屑、絹物の小切、と云つたような分類てあらうかと思はれた。それから我々は流し元を窺いて見た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

勿論、水道の管がチャンと付いて居る。竈も西洋風に出來て居た樣に記憶する。棚や押入の整頓は申す迄も無い。只こゝで我輩の一つ氣のついた事は、此家の他の部分の稍廣い割合に、此流し元の案外に狹い事である。善く整頓させておけば是れて濟むのであらう。濟むとすれば狹い方が無論善いのである。世間には隨分ダヽぴろい不取締な勝手元を見かける樣であるが、あれはイカガなものであらうか。それから我々は又風呂場を覗いて見た。是れも案外に小さかつた。是れは必ずしも小い方が善いと云ふ譯でもあるまい。夫人の笑ひ話に「私の大きな躰がドウして是れにハイルかと初は思はれた」と云ふ事である。然し此小い風呂場が此一家族の健康を助ける事は蓋し甚だ多いであらうと思ふ。子達は皆毎晩必ず寐る前に風呂にハイルとの事。それて(であらう)こゝの子達は曾て風を引いた事が無いと云ふ。「風呂だけは僕の內の贅澤です」とは佐々氏の言葉であつた。

△押入の中の工夫

是れて家內の巡覽を終つて、我々は再び元の食堂に返つて來たが、最後にこゝの押入を見せられて、又更に感嘆の聲を發せずには居られなんだ。此押入の下の段には大きな風呂敷に包んだ物などが行儀よく入れられてあつたが、それは暫く問題以外としておいて、其上の段の使ひ方が實に工夫を凝したものである。こゝには、食卓の上に必要なる器具の中で、稍大切なる物を置くのであるが、先づ其押入の中央に箱があつて、其箱は縱橫色々に仕切られてあつて、其仕切の中に種々なる器具が分類して置かれてある。即ち、ナイフ、フォーク、スプーンなども奇麗に光つて並んで居る、洋食皿も奇麗に揃うて重なつて居る、と云ふ有樣である。それから其箱の後の棚の上には、大小幾つも幾つもの鑵が並べて置いてある。それが只譯もなく並べてあるのでは無く、右から左へ背の高さで並べてある。それだけでも何程の趣きがあるか知れぬ。それから又、左側の壁に沿うて縱に幾つも幾つもの板の仕切が付けてある。そしてそれには細々とした品物が別々に入れ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てある。所が、此仕切の仕方について又一つの工夫が加へてある。それは外でも無い、其仕切の板を壁と直角にせずに、少し前の方に寐せて斜に打ちつけた事てある。若し直角にしたならば、中に入れてある物が前から見にくゝ、少し奥の方の物は全く見えぬ事になるのであるが、斜に前の方に寐せた爲に、前の方から奥の方まで仕切の中が皆一列に見えて居る。即ち、燗徳利も袴をはいて立つて居る、猪口も俯伏になつて重なつて居る、七味唐辛の竹の筒も栓を頭にして壁に凭れて居る、と云ふ景色てある。

△改革の氣象

一言にすれば、佐々氏の家庭には、到る處に秩序と整頓とがあつて、一つとして散亂して居る物は無く、一つとして混雜して居る物は無いのてある。而して其秩序と整頓との底には明かに改革の氣象が見えて居るのてある。而して此改革の氣象は佐々氏と夫人と共に有して居るのてある。

今こゝには佐々氏の家庭を措くので、公人としての佐々氏については何にも云はぬ筈てあるが、然し佐々氏の人物を示す爲には、又少しく云はねばならぬと思ふ。それで專賣支局に於ける佐々氏の事を聞くに、一にも改良、二にも改良と稱して、常に何事にも新工夫を加へて居ると云ふ。其例を擧げて見れば、先づ全支局に於いては筆、墨、硯、算盤など一切用ゐぬ。官吏が筆墨や算盤を用ゐずに何をするであらうかと思はれるが、聞いて見れば實に愉快な事てある。筆の代りにはペン、墨と硯との代りにはインキ、そして一切日本紙を用ゐずに西洋紙を用ゐるのてある。それから算盤の入らぬ譯は斯うてある。專賣支局の事てあるから、諸方から持つて來る葉煙草を受取つて、其品質を見ては等級を定め、其等級と目方とに依つて代價を算出するので、算盤は尤も多く必要な筈てある。然るに、佐々局長は等級と目方とに應ずる精細なる代價表を調製した。即ち、第一等何百何十匁は金何程、第二等何貫何百目は金何程と云ふ樣に、總べて一目の下に瞭然たらしめたのてある。そこて算盤は全く不用に歸してしま

つたと云ふ事てある。是れは佐々氏が何につけても改革の氣象に富んて居る事の僅に一二の例てあるが、氏は又、局内の官吏に總べて洋服を着用せしめる、其品行を嚴重に監督する、其家庭の改良を勸告する、と云ふ樣に、(稍干渉に過ぎる嫌はあるかも知れぬが)、兎も角も我が主義の擴張を計り、人の爲に便利幸福を計るに於いて、實に勉めたりと云ふべきてあらう。或日、全局の屬官が紋付袴の出て立ちて佐々局長を訪問した時、局長は頻りに家庭に於ける腰掛制度の利を説いて聞かせた。屬官先生は其說を謹聽して居たが、「何分にも椅子のテーブルのと申して少からず費用の掛かりまする事て」と恐る〳〵返答に及んだ。所が局長、「イヤ、君の其の紋付の羽織一枚を拵へる費用で、椅子テーブルは立派に揃ふ。それから又、君の内の縮緬の座布團の費用があれば」と盛んに切込んだので、屬官先生大きに赤面に及んだと云ふ話てある。

佐々氏は實に斯くの如き氣象を以つて家庭の改革をやつて居るのてある。佐々夫人も亦、「軍艦の中ても一

度見て來ましたなら又善い考へも出るかと思ひますが」と我輩に話された。こゝにも改革の氣象は見えて居るのてある。如何にも軍艦の中は狹い處を便利に使ふのてあるから、秩序と整頓との爲には學ぶべき點が實に多いてあらう。只好奇心の爲に軍艦を見たいと云ふ婦人は多いてあらうが、家庭の事務を整理する參考の爲に軍艦を見たいと云ふのは、實に一段の見識と云はねばならぬ。

△烏の子、烏の卵

こんな話を聞いて居る中、庭の方にガヤ〳〵と人聲がする。見れば子供が三五人、烏の子を捕へて來て居るのてある。子供は此家のと、外に友達も交つて居る。日曜の事とて朝から愉快に遊んて居るのてあらう。筒袖のネマキらしい者を着たのもある、半ジャツと猿股とて寒くもないか平氣な顏をしたのもある。銘々に何やら云つて烏の子を手柄にして居る。やがて其烏を籠に伏せて、又何やら取りに走つて行つた。庭には別段に何も植ゑてなく、只子供の遊び場になつて居るらし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

く、そこらにショベル（鍬）などが轉がつて居る。川に臨んだ木柵の所には大きな樫の木か何かゞあつて、其上に今鳥が二疋來て鳴いて居る。取られた子の跡を追うて來たのであらう。聞けば、鳥ばかりでなく、こゝには色々の鳥が來てアチコチの高い木に巣をくふ事が毎度であるそうな。それに又、どこかの籠からの迷ひ鳥が折々やつて來る事があるとの事。是れも此間つかまへたのだと云つて窓の側の大きな籠に美しいインコが一羽入れてあつた。暫くして子達は又ドャ〳〵とやつて來た。今度は鳥の卵を持つて來て得意げに見せて居たが、先程から親鳥の來たのを哀れに思うて居られたらしい佐々夫人が、「可愛そうに、そんな事をするのでは無い」と、叱るでも無いがタシナメたので、子達は又卵を戻しに走つて行つた。それでも鳥の子はまだ籠の中に伏せられて居た。

△筒袖と袴

それより佐々夫人は衣類の事について種々の說明を與へられた。佐々氏がフランネルの筒袖を着て居られる事は前にも書いておいたが、夫人も被布の下には筒袖を着て居られる。夫人の話に依れば、夫人は佐々氏に來てから着物を新らしく拵へた事はなく、皆古い物を樣々に拵へなほして着て居るとの事。佐々氏の說に依れば、十年、十五年の後には時勢が一變してしまふ、古い物はドン〳〵と着てしまふが善い、それが破れてしまふ頃には、新時代の風俗に從つて新しい者を拵へるが善いと云ふのである。其位なサッパリした考へで無くては、新工夫も新意匠も出るものでは無い。それから又夫人は、「今日は着て居りませぬが、いつも平生は黑い袴をはいて居ります」と云ふ事であつた。筒袖に袴、其形及び飾は如何に進步變遷するか知らぬが、大躰において是れが將來日本婦人の服裝となるに相違ない。

△赤ン坊の衣類

それから夫人は赤ン坊の衣服について其新意匠を說明せられた。夫人が赤ン坊を片手に抱きながら、實物について說明せられる所を聞くに、先づ第一は綿入の着物を拵へぬ事である。綿入の着物を拵へて、それを解いたり、洗つたり、拵へなほしたりする樣では、迚も手の廻りされるものでは無い。そこで着物は一切ネルと極めたと云ふ事である。扨其ネルの着物が决して只の着物では無い。前から着せるのもあれば後から着せるのもある。橫から着せて脇の下で止めるのもある。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

總べて一種特別の形で、一種特別の仕立方である。そして着せるにも便利、脱がせるにも便利、寒ければ上から一枚づゝ着せかけて行く、暑ければ上から一枚づゝ脱がせて行く。冬は綿入、春は袷、夏は單と云ふ樣な面倒は少しも無い。そしてネルの事であるから洗濯にも餘り手は掛からぬ。こんな風にでもしておかねば大勢の子供の世話は迚も出來ぬと云ふ話である。それからオシメの事が又面白い。「あなた方でもオシメにお困りで御坐いましよう、皆さんオシメには困つて入らつしやるのですから、それで私、ドコの奥さんにもソウ申すのですよ」とて、夫人の說明せられる所に依れば、オシメは總べて紐で結びつけるか、釦で繻絆に止めるかしてあつて、足の運動を妨げず、そして抱く時にズリおちぬように、甚だ都合よく出來て居る。物は矢張りネルか何かで、形は色々に出來て居る。總べて何一つとして新しき工夫の加はつて居ぬ物は無いのである。それから又、赤ン坊をつれて遠くへ行く時、大きなオシメを風呂敷包にして持つて行つて、其のぬれたのを又くるんで持つて歸るのは、如何にも不便、如何にも不躰裁な事であるから、そこにも一つ工夫をして、そんな場合には、紙と綿とで何枚かオシメを拵へ

て、それを持つて行く事にしたが、それならば餘りカサにもならず、使つた分は片端から棄てゝ行けば、惜しくも無し、荷にもならず、大變に便利であるとの事。扨、是等の衣服については、猶委しく圖入にして說明したいと思ふが、それは次の號に讓つておいて、ここには一つ面白い話を書いて、佐々夫人が如何に新意匠に富んで居るかを示すとしよう。夫人の妊娠中、腰を暖かにするが善いと云ふので、佐々氏が外出のついでに、裏毛のメリヤスの桃色で美しいのを、丁度腰卷にするだけ買つて來た。すると、夫人はそれを見て、是れは腰卷にするよりか外に善い工夫があると云つて、其長方形のメリヤス地を横にして、其眞中よりは少し上の方に、二つ並べて目の樣な穴をあけた。サア何にするのやら誰にも分らぬ。所が夫人は其兩方の目の上にチヨイ〳〵と飾の襞を付けた。それでもマダ何になるやら分らぬ。所が夫人は其メリヤス地の上の方の端をクケて一筋の赤い紐を通した。そして其紐をグウッと絞つた。そこでそれはチヨオト田舍の人の着る赤毛布の樣な者になつた。所が赤毛布とは着樣が違ふ。夫人はそれを前から赤ン坊に着せるのである。二つの目に兩方の手を通させて、そして首の後で紐を結ん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

でおくのである。そうすると、目の上の皺が丁度、肩の所の飾になつて、案外善い恰好の者になる。是れには佐々氏も今更に感心したとの事である。我輩もそれを赤ン坊に着せた所を見たが、成程善い防寒具であると思うた。

△嫁入道具にミシン一臺

其外の子達の衣類については別に委しくも聞かなんだが、勿論大概は洋服で、其洋服も、シャツも、ズボン下も、大概は手製であると聞いては、實に驚かざるを得ぬ次第であるが、それが爲に上等の裁縫ミシンが一臺備へてあるのである。ミシン縫と云へば、勸工場物のシャツか何かを見て、直にボロ〳〵とほどけてしまふ者の様に思ふ人もあるが、それは大きな間違で、本當のミシンで縫うたものは、一々鋏で切つて行かねば解く事は出來ぬと云ふ事である。そして其使ひ方はと云ふに、至極譯のない者で、少しばかり稽古すれば直に出來ると云ふ事である。尤も價は餘り安いものでは無く、三四十圓もする由なれど、善く〳〵積つて見れば安いものだと云ふ話。それで佐々氏夫婦は親戚の人などに、「娘の嫁入道具には是非ミシンを一臺持たせてやるが善い」と勸めるとの事であるが、如何にも、鏡臺、針箱、簞笥、長持を幾ら華々しく〳〵した所で、後々何の役にも立つものでは無い。嫁入道具にミシンとは實に善い思ひつきである。

△さゝ錦、いち子織

それから夜具の話が出たが、佐々氏の説では毛布に限ると云ふ事で、日本の夜具はカサが大きくて入れ場所にも困るし、毛布ならば十人分くらゐ一つの押入にもハイつてしまふし、それに洗濯もゾーサが無くて善いと云ふのである。尤も、佐々氏の内には今手織物の蒲團が數人前そろつて居るので、それの破れる迄はそれを使ふとの事である「手織ですから迚も生涯に破れはしませんが」とは夫人の言葉であつた。それから今でも夏だけは毛布を使ふので、それを使ふには金巾の袋に入れておいて、袋だけ幾度も洗濯するとの事である。此金巾の袋は毛布にも限らず、總べての蒲團にかぶせてあるらしい。それから又、此手織の事について面白い話がある。佐々氏夫婦が京都に居られた時、西陣の錦の織屑が極々安くて買へるのを見て、何かになるであらうと思うて、それをドッサリと買込んで、それから福岡に行つて居られた時、女中に機織の上手なのが來たのを幸ひに、其織屑を繋ぎ繋いで、夫人と女

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中と二人並んで盛んに機を織りだして、一年餘りの間に四十何反といふものを織りあげたと云ふ事である。それで其手織物で、蒲團、坐蒲團、帶、羽織、何だのかだの色々と出來て居る。其時の女中はそれで嫁入仕度が出來たと云ふ事。又、内の入用に使つて餘つた分をば、平素贅澤にして居る親類などに進物にして、聊か諷してやつた事もあるといふ事。我輩も坐蒲團と羽織とを見せて貰つたが、實に丈夫そうな奇麗な物である。それで材料は一反に五十錢ばかりしか掛からぬが、賣物にするならば一反五圓位には賣れるであらうとの事。羽織と云ふのは殊に夫人が意匠を込めて佐々氏の着料に拵へられたので、表から裏まで打通して、裏の所だけは裏らしい縞柄になつて居て、そこに「さゝ錦、いち子織」と織りだしてある。「いち子」とは夫人の名である。我輩は夫人の根氣に敬服すると同時に、又其趣味に敬服する者である。

△食事の話、衣食住論

それから食事についての話を聞くに、佐々氏曰く、「僕の内ではドンな客が來ても皆此食卓で一しよに食ふが、是れが若し一々膳を出して並べるのであつたら、それは迚も堪つたものでは無い。」又曰く、「僕の内では

成るべく椀や皿の數を使はぬようにしてあるが、若し一人前に四つも五つも使ふとして、十人前で皿だけが四十もあるとするならば、それを出したり、入れたり、洗つたり、拭いたり、中々容易な事では無い。それに臺所では又其一割くらゐは破さねばならないし、迚も堪つたものでは無い。」又曰く、「飯を幾度も幾度も代へて食ふのが手數の第一であるから、内では大きなものに一杯盛切にして渡す。吸物などゝ云ふ面倒くさい、手數の掛かる者は初から拵へない。」

食事の話から衣食住の全體に關する議論が出たが、佐々氏の意見は正に我輩の考へと合して居る。即ち、小さな薄暗い家に住んで、澤菴で茶漬か何か食うて、そして外に出る時だけピカ〳〵するような裝ひをする人があるが、あれは實に心得違な話して、先づ空氣の善い所の健康に適する家を選んで、それから食物に十分の注意をして、何でも體を養ふ事を第一に勉める、體さへ善ければ着物なんぞはドウでも善い、と云ふのである。

△晝飯、オルガン

兎角する中に十二時となつた。主人は我々を食卓に導いた。子達はマダ皆歸つて來ぬ。先刻から獨り内に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

殘つて居て、開き戸の引手にぶらさがりなどして遊んて居た四つばかりのだけは、足の高い、小い椅子に乘つて、我々の間に着席した。先づ刺身とビールとが出た。やがて夫人は「何てすか妙な者が」と云ひながら、其お手料理のビフテキを持ち出てられた。それに續いてはライスカレーが出た。我々は何れも結構に頂戴した。食卓上の談話としては、多少の政治論などもあつたが、それはコヽに記す値もあるまい。其中に子達がドヤ／＼と歸つて來た。「ドコに行つて居ました。時計を御覽なさい」とオッカさんに云はれて、皆仰向いて時計を見たが、シャツ一枚の元氣な先生は、「十二時三十分」と少し笑ひながら低い聲て云つて居た。十二時には必ず歸つて來る筈になつて居るのであらう。一人の友達を交へて子達は皆食卓に着いた。ライスカレーはそれ／＼に盛りわたされた。彼等は皆其大きな皿をかゝえて、サモうまげに貪り食つて、イタヅラの跡の空腹を充たして居る。其時我々は食卓を離れて一方のテーブルに戻つて、丁度先刻到來した日光羊羹の御馳走に預かつた。暫くすると子達の一人は早や食事を終つて、オルガンに向つて進軍の曲を彈いて居る。前の圖のハの字の所は即ちオルガンてある。小いのてあるが、是れ一つて何ほど家庭が賑ふか知れぬ。

斯くて我々は半日を佐々氏の家庭に過して、此食堂(即ち此家庭の中心)の如何に樂しきものてあるかを十分に悟り得た。聞けば、冬には此室のテの字の所に暖爐を据ゑつけて、煮炊一切に此ストーヴの火を利用するので、暫く臺所もコヽに移される有樣て、一層此室が賑かに樂しくなると云ふ事てある。

佐々氏は斯くの如く家庭を樂しくして、其代り用事の外に外出する事は殆んど無く、子達などは我家以外て食事をした事は全く無く、物見遊山と云ふ事も決して無く、日曜などには家族打寄つて家庭て遊ぶのを無上の樂みとして居られるのてある。折々は人を集めて相撲の催しなどもあるとの事。

食後間もなく來客があつたので、我々も今はとて辭し去つたが、近來、我輩の身に取つて、此半日の如く有益に、愉快に過された時間は決して無かつたのてある。

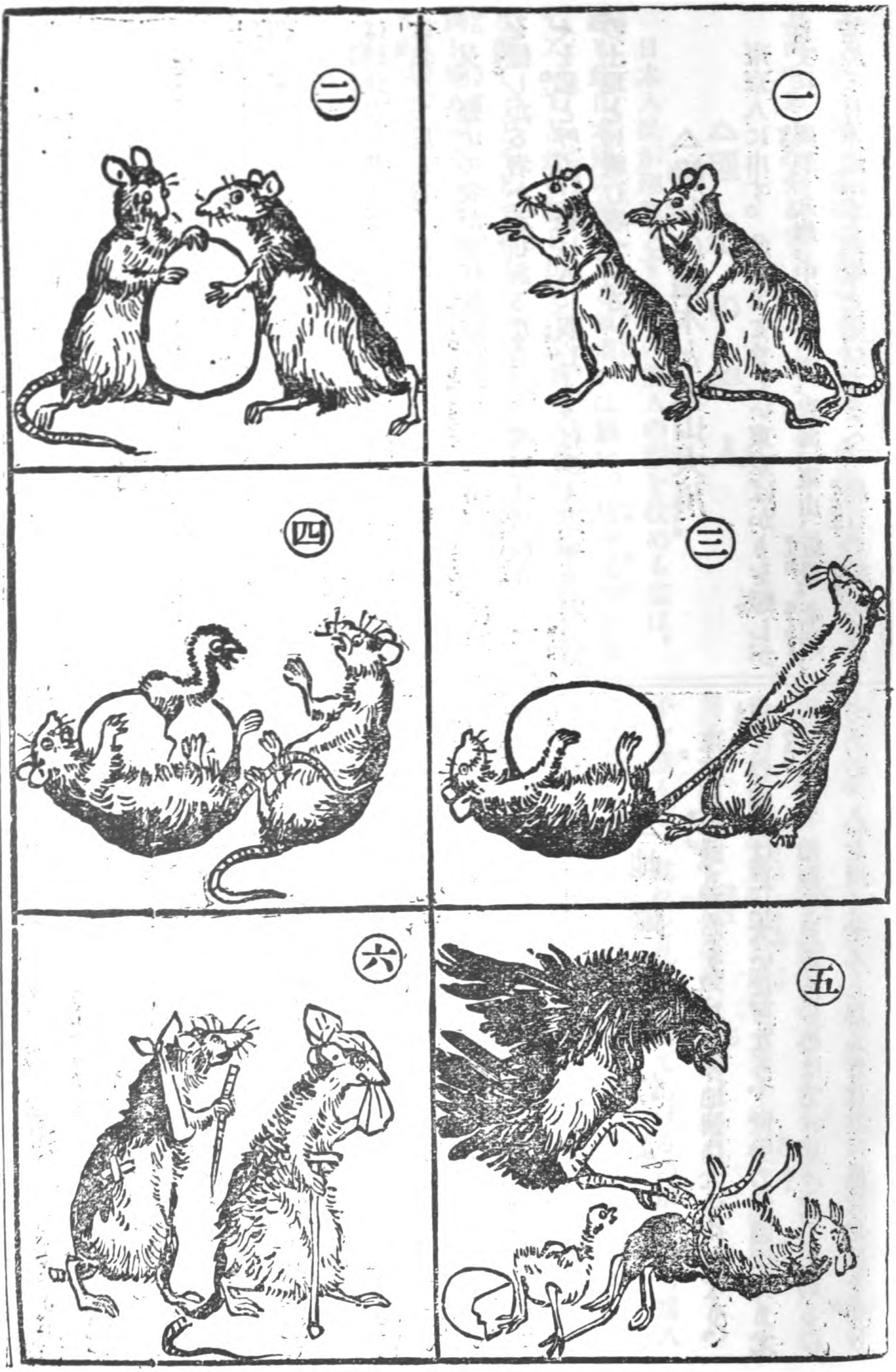
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●ワシントンと其母

此間銀座の教文館でワシントン其とオツカさんとの肖像を買つて來た。二人とも實に何とも云はれぬ善い顔である。先づワシントンの顔の柔和な事。是れが英國に逆らつて蹶起した米國獨立軍の大將だとは思はれぬ位てある。是れに比べると、ナポレオンとか、ビスマークとか云ふ人の顔が、如何にも賤しく見えて來る。次にオツカさんの顔の福々として居る事。是れで餘程老年の時の肖像でもあらうが、丸で子供の顔の樣な所

がある。日本の美人などゝ云ふ顔とは全く出來が違ふのである。ポン太が幾ら美しくても、是れに比べると下品に見えて仕樣が無い。此樣なオツカさんの腹から生れたればこそ、ワシントンもアノ樣な人になつたのであらう。我輩は此母子の肖像を二つ並べて一つの額にして、茶の間の鴨居に掛けてあるが、朝晩に是れを見る度には、我が身の不平顔、腹立顔、高慢顔がツク〳〵と厭になつて來る。それてトゥ〳〵柳洲君に寫して貰つて、此一頁の額にしたのである。

鼠の失策



偶感

△蝸牛と猫

家庭と云ひ、家庭と云ふ、決して屋根の下ばかりに引込んで居る事では無い。野中至氏夫婦は富士山の絕頂に家庭を作つて居たでは無いか。

家庭を愛して旅行を嫌ふ者が若しあるならば、我輩は躊躇なく其人々を蝸牛と呼ぶ。蝸牛は常に家を脊中に負うて居る者である。

又、強いて我が生れ故郷に執着し、或は都會ばかりを戀しがる者が若しあるならば、我輩は躊躇なく其人々を猫と呼ぶ。猫は人に親むよりは多く其家と其近隣の土地とに親む者である。

△緣日の植木と大山大川

東京人に申す。此せヽこましい東京ばかりを戀しがらずに、奧羽、九州、中國、四國、東海、東山、近畿、北陸、せめて日本國中を我家と思ひたまへ。緣日の植木に見

とれて油烟のかゞりに鼻の穴を眞黑くするばかりが能では無い。大山、大川、白砂、靑松、少しは大きな景色をも味ひたまへ、少しは淸い景色をも知りたまへ。

△新天地

內地人に申す。臺灣も日本の中で御座る。北海道も日本の中で御座る。

日本人に申す。日本人は日本國以外に足を踏みだしてはならぬと云ふ規則は決して無い。朝鮮も御座る、支那も御座る、サイベリアも御座る、濠洲も御座る、布哇も御座る、南北アメリカも御座る、世界到る處に新天地は橫たはつて居るので御座る。

△地圖を掛けよ

東京の地圖も可なり、日本の地圖は大いに可なり、東洋の地圖は更に大いに可なり、世界の地圖は尤も尤も妙なり。地圖を見る人の心は常に廣々として居るのである。心を廣くせんと思ふ者は其家庭に地圖を掛け

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

よ。譯も無い書畫の軸などよりは、地圖の方が何ほど上品であるか知れぬ。

△理想の美人

日本人民が理想とする所の美人の型を改める迄は、迚も此日本國の强くなる氣遣ひは無い。蛇や毛虫を見てアレーと金切聲を出すのを貴婦人らしいと思ふような事で、どうして頼もしい婦人が出て來るものか。鳩胸を嘲り「くゝみ女」を賞賛するような事で、どうして倔强な女丈夫が出て來るものか。口癖の樣に「おてんば、おてんば」と云ひ、只徒らに「おとなしく、おとなしく」と云ふような事で、どうして役に立つ婦人が出て來るものか。

△美しざかり、働きざかり

廿二三歳の娘が、たとひ冗談なりとは云へ、「私はモウおばあさんで御坐います」などゝ云ふようでは、婦人の地位はマダなかゝゝ高まらぬ。婦人が男子の玩弄物を以つて自ら甘んじ、只其色を以つて媚を獻ぜんと欲するが故に、徒らに年の若さを喜ぶ事になるのである。男子の事業の半を助け、男子の弱る心を勵まし、男子と相並んで浮世の波を凌ぎ、五人、七人、十人の子を産んで、其れを見事に育てあげるのが、即ち婦人の天職であると悟らば、何も强いて若がるには及ばぬ譯である。玩弄物としての美しざかりは十七八にあるかも知らぬが、婦人の眞の働きざかりは三十歳、四十歳、五十歳に在るては無いか。

△子供預り所

大阪の博覽會に子供預所と云ふがある。子供を連れた人が博覽會を見物する間、其子供を預る所である。博覽會に限らず、廣く社會一般に此樣な者を拵へたい。今の幼稚園を一歩進めれば出來る筈だ。元來、幼稚園と云へば、働く人、貧しき人の為に子供を預り、其他孤兒等を世話する所であるべき筈。さすれば養老院、幼稚園、二つ相並んで稍此不完全なる社會を整頓させるであらう。

讀者の顧問

△目下の者に對する呼び方

佐恂生と申さるゝ方より「妻にせよ、弟妹にせよ、子女にせよ、總べて目下の者を呼びますには、必ずサンとか君とか相當な敬語を用ゐるが正當であらうと思ひます、名くらゐは何でも無いと云ふ人もありませうけれども、人類相互の禮儀として決して忽せにすべからざる事と思ひます、若しソコに正當の理由があれば今から改正すべしと思ひます、敢て記者の御意見を伺」ふとの事。我輩は全然佐恂君に賛成いたします。子に對して親の權が強すぎ、妻に對して夫の權が強すぎ、弟妹に對して兄の權が強すぎるのは、全く封建制度、家族制度の弊習であります。西洋では夫婦互に其名を呼びずてにして居る、夫が妻の事をメリーと呼べば、妻は夫の事をジョンと呼んで居る。又夫婦互ひに「我が夫」「我が妻」、「我が親愛なる夫」「我が親愛なる妻」などゝ呼んで居る。兄弟姉妹もおなじ事で、名を呼ぶ時

には皆呼びずてゞ、互ひにブラザー(兄弟)と呼び、シスター(姉妹)と呼ぶ。兄とか、弟とか、姉とか、妹とか云ふ字は初から無いのである。區別する必要のある時には、年上のブラザー、年下のシスターなどゝ云ふのである。子が父母に對しては只フアーザー(父)、マザー(母)と呼ぶのである。父とか母とか云ふ言葉は、其言葉だけで既に尊敬の意を含んで居るから、又其上に敬語を付ける必要は無いのであらう。そこで日本においては、勿論それを學ぶ譯にも行かず、又學ぶにも及ばぬが、其精神は參考にする事が出來る。日本では(男子の極めて親しき間柄の外は)呼びずてと云ふ事は到底行はれぬ勢ひであるから、どうせ敬語を用ゐるものなら双方から用ゐる事にせねばならぬ。福澤先生は子女に對して常に何々サンと呼んで居られたと云ふ事である。其外、妻を何サンと呼び、兄弟姉妹互ひに敬語を加へて呼んで居る實例は無いても無い。それで是れは成るべく早く、成るべく廣く行はせたいものであるが、然し多年の習慣は又中々動かしがたいものであ

るから、今々新に結婚する人、新に子を持つ人は、ぜひ最初から決行して貰ひたい。又此ついでに云つておくが、家族の間に呼びずてが惡いならば、他人に對する呼びずては更に惡い筈である。女中などを呼びずてにするのもゼヒ早く改めて貰ひたいものである。

△學資、養子、隱居

當年廿三歲の男子、自分が戶主で母と妹と一しよに暮して居るが、或家から養子に來て吳れぬかと相談を受けた。其家には二人の娘があつて、其姉娘に娶はせるられるので、それを承知すれば、學資を出して醫學を修業させて吳れる筈である。親戚などにも異議は無い。只法律上いかがな者であらうか、隱居をしておいて養子に行く事が出來るであらうか。と云ふ質問が大阪の某氏から來た。

我輩思ふに、今の民法は家族制度の皮を被つて居るけれども、其實質においては個人を本として居るので、家督と云ふ樣な事よりも結婚を重しとして居るのである。隱居とか養子とか云ふのは、畢竟、家族制度の皮であるから、總べて深く意とするには足らぬ。婚姻の爲には若き者の隱居も明かに許されて居る。尤も裁判所の許可を得ねばならぬ事になつて居るが、裁判所とても別に妨げをする譯はあるまい。

そこで法律上の事はドウでも善いが、我輩は少しく外の點において反對をせねばならぬ。我輩は元來養子と云ふ事に反對して居る者であるが、それは前に云ふ皮として、只形式ばかりの事とすれば、必ずしも深く爭ふには足らぬ。表面に養子とは云ふもの丶、其實只我れと其娘と結婚するのであると思へば善い。然し、學資を得たいが爲に其娘と結婚する、醫者になりたいが爲に其家に養子に行く、と云ふのであるならば、それは不見識千万、不都合千万な話である。

結婚は總べて愛を以つて本とせねばならぬ。愛よりも利を重んずる結婚には、我輩斷じて反對せねばならぬ。

▲河骨の莟、坊主の立ちおよぎ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

樂しき生活

△廿五人の孫

遠州掛川町 宮本新藏君

東海道の鐵道に乘つて遠州を過ぎたお方は知つて居られるであらう。名高き金谷の長いトンネルを通つて二三の停車場を過ぎると、汽車は小山の切割を出て、右には名所の今の浦が見える、左は一面の水田であつて、其間に遠く近く幾多の村落が見える、と思ふ間に「中泉、中泉」と呼ぶ驛夫の聲が聞えるであらう。其中泉町に鈴木文藏と云ふ菓子の製造をする家がある。同家は昨年の冬嫁を迎へて一家に三夫婦揃となつた。三夫婦揃の家は滅多にあるものでは無い。僕が此三夫婦揃の(睦まじくて、壯健て、職業に出精して居る)此家の事について通信しようと思ひついたのは、家庭夜話の子孫繁昌の話を讀んだ爲である。

文藏氏と云ふは現時の戸主て、同家の家族は氏と氏の妻なみ子の外に老夫婦即ち親達と、若夫婦と、外に四男一女と末弟一人と、總べて十二人暮してある。それに職人小僧を加へると二十人以上になる。食事の時などはそれは〱賑かな事である。又、文藏氏の兄弟姉妹が何れも〱子福者である。世間の謂はゆる子福者の中には、兎もすれば妾腹のが交つて居るが、此一族には妾腹と云ふイヤなものが一つも無い。

富重
モト

- 長女ナミ(五十三)
  - 辰(廿二)
  - コウ(十九)
  - ヨシ(十六)
  - 萬(十四)
- 長男文藏(四十八)
  - 賢(廿二)
  - 康(十六)
  - 一(十三)
  - ハマ(十一)
  - 武(八)
  - 清(六)
- 次女キノ(四十五)
  - 政(廿六)
    - モト(二)
  - 仙(十八)
  - 字(十四)
  - ムラ(七)
  - サダ(五)
- 次男善(卅八)
  - 賢(十五)
  - キミ(十三)
  - 榮(十)
  - ツヤ(八)
  - 三(六)
  - 辰(三)
- 三男鍵(卅五)
  - 芳(十二)
- 四男愛(卅二)
  - 愛(十一)
  - キミ(八)
  - ハマ(五)
- 五男字(廿七)

老夫婦は七十二歳の吉重氏と六十二歳のトヨ子とて其間に五男二女が生れて、今では孫が廿五人と曾孫が一人ある。それを表にして記せば右の通りであるが、思ふに吉重氏の孫や曾孫は今後猶大いに増加する事であらう。長男の文藏氏もまだ子供の出來ぬ年でもなし、次男以下は寧ろ是れから子供の出來る年である。若し吉重氏が「子孫繁昌の話」の風間周之助の年頃になつたならば、孫と曾孫の年はおろか、其名だけを記憶するさへ六かしくなるであらう。めでたし〳〵。

△爺婆の心配

大磯の病人　三河生

僕の家は海岸にて東西南北の風を引受け、波の音は耳元に響きわたり、土地馴れぬ者には餘り善い心地のせぬ時もある。去十五日の夜は、西南の强風が波をおだて〻物凄い光景であつた。我が子は本年七歳の男子、其大荒を無邪氣に喜んで居る處へ、我が家の裏に住む獵師で山下三吉君（本年五十七）が尋ねて來て「東京のお方、大丈夫、安心なさい、今どき荒なんぞ決して無いと、鰹つりや網船なんどの話に氣を晴らさせ、十一時過るころ歸宅した。翌朝、三吉君の母親（本年七十八）が葉書の代筆を頼みに來て、左の如くに話しだした。

昨晩はねえ、爺樣（三吉君の父太左衛門、本年八十二歳）が寢る際になつて、三吉の姿が見えぬと云つて心配を仕だし、どうしても眠られぬと云ふ。私も氣になつて色々考へて見ると、昨日の晝から三吉の幼少からの友達が死んだのでアレが云ふには、段々取る年で不獵ではあり、仲間同志苦しんで居るより死んだが增しかも知れぬと愚痴を云つたが、若しや若し、間違つた心を起し、海へでもと思つたら、ねえアナタ馬鹿なもので、ツイ此樣に考へると一層眠られませんで、それから起きて外に出て見ると、いつも早寢のお前樣の家で大きな聲が聞えて居るので、若しやと廻つて來て窺いて見たら、三の奴が据わりこんで居るので、言葉を掛けるのは跡にして直に歸つて爺樣に知らせて安心させました。

僕は此話を聞いて、荒稼の獵師にも似ぬ柔和な志しと、非常に嬉しく感じました。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

結婚離婚の統計

布川静淵氏の研究の結果を「社會學雜誌」第三號より少し借用して左に記す。

先づ明治三十二年中における結婚數と離婚數との統計を見るに、

結婚數	二十九万七千三百七十二
離婚數	六万六千五百四十五

即ち結婚の約五分の一は離婚となる割合である。即ち十組の中で二組はダメとなるのである。然し是れはマダ驚くに足らぬ。

次に夫婦の年齢別にした結婚離婚の統計が甚だ面白い。先づ結婚の尤も多いのは左の八種である。

男三十歳以上卅五歳以下 女十五歳以上三十歳以下	五、四〇二四
男二十歳以上廿五歳以下 女二十歳以上廿五歳以下	四、九五〇二
男廿五歳以上三十歳以下 女二十歳以上廿五歳以下	四、四九〇五
男廿五歳以上三十歳以下 女十五歳以上二十歳以下	二、三一〇九
男二十歳以下 女十五歳以上二十歳以下	一、七四九〇

男三十歳以上卅五歳以下 女二十歳以上廿五歳以下	一、六六七七
男廿五歳以下三十歳以下 女廿五歳以上三十歳以下	一、三七二二
男三十歳以上卅五歳以下 女廿五歳以上三十歳以下	一、一五三四

次に驚くべき結婚の種類を少し擧げて見ようなら、先づ男二十歳以下、女五十歳以上六十歳以下と云ふのが一組ある。又男六十歳以上、女十五歳以上二十歳以下と云ふのも一組ある。男四十歳以上、女十五歳以下と云ふのは二組ある。男廿五歳以上三十歳以下、女四十歳以上五十歳以下と云ふのは三十四組ある。それから最後に男女とも六十歳以上のが實に百〇七組あるのである。

扨是等の結婚に對して離婚が如何なる割合になつて居るかと見るに、第一に十五歳以下の女の結婚は甚だしき不結果である。是れは特に注意すべき事である。

（結婚百に對する離婚の割合）

女十五歳以下 男二十歳以下	六七、一
女十五歳以下 男廿歳以上廿五歳以上	四九、四
女十五歳以下 男廿五歳以上三十歳以下	五〇、〇

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女十五歳以下 男三十歳以上卅五歳以下〜…………七三、三

半分以上不結果になるような危険な結婚をさせて堪るものか。其中でも、男が若すぎてはいよ〳〵悪く、年を取りすぎては更にいよ〳〵悪い事が右の統計に見えて居る。第二に十五歳以上廿歳以下の女の結婚は男の年齢に係はらず、甚だ好結果である。そして男の年齢の多いだけ離婚の数が少くなつて居る。第三に廿歳以上廿五歳以下の女の結婚も先づ好結果である。第四に廿五歳以上三十歳以下の女も先づ〳〵可なりの結果であるが、おかしい事には三十歳四十歳の男に對して尤も多く不結果て、年下の男と遙に年上の男とに對して好結果を示して居る。第五に三十歳以上卅五歳以下の女は尤も多く三十歳以下の男と結婚して居るが、其場合には却つて甚だしき不結果を示さずに、三十歳以上四十歳以下の男に對して五分内外の不結果を示して居る。第六に卅五歳以上四十歳以下の女は全年配の男に對して六分五厘と云ふ甚だしき不結果を示して、其前後においても五分七厘、四分四厘の不結果を示して居る。第七に四十歳以上の女は皆悉く不結果て、六分九厘、六分五厘、五分七厘、五分二厘などの割合を示して居る。

次に是等の離婚(六万六千餘)の中て、結婚後何程の月日を過した者が尤も多いかと見るに、一個年以上二個年以上の者が一万六千ばかり、六個月以上一個年以下の者が一万一千ばかり、其次に多いのは五個年以上十個年以下の九千、三年以上四年以下の七千八百、二年以上三年以下の七千五百等である。

最後に離婚者の運命の統計が又甚だ面白い。妻に死に別れた男、或は妻と離婚した男は、百人の中で五六十人まで初婚の女と再婚して居る。

夫と離婚した女で初婚の男と再婚した者は僅に五六人の外ない。男女とも再婚の者は三十二三ある。夫に死に別れた女で再婚した者は僅に四分の一、そして其多くは妻に死に別れた男とである。

▲仲なほり元の女房の聲になり

天文の話

是れから追々暑くなると、晝間は成るべく家の中に引込んで、夜になれば皆そろ〳〵と外に出かける。そこで少し天文の事を心得て居ると、ツイ話の種にもなつて、色々面白い事がある。何も我輩が天文の事を心得て居る譯では無いが、本に書いてある事をチヨイチヨイと受賣して見るのである。

△星の數

星の數、馬鹿な、あれほどの者が一々數へられるか、と云ふ人もあるか知れぬが、專門學者はチヤンとそれを數へて居るのである。即ち、眼力の強い者には七千位は見える、極々強い望遠鏡を用ゐれば一億五千万位は見えると云ふ事である。

△恒星、遊星

星に二種あり、一を恒星と云ひ、一を遊星と云ふ、

など、書きだせば、學校の教科書の樣であるが、マアちよいと念の爲に記しておく。恒星と云ふのは、遠い、遠い、遠い、遠い處にあるのでアノ樣に小く見えるが、實は我が太陽と同じ樣な者である。それでヤハリ太陽とおなじく東から昇つて西に入る樣に見える。肉眼で見える七千の星は大概それである。故に、宵と夜中と夜明とは天の恰好が大變に違ふ。次に遊星(或は惑星)と云ふのは、我が太陽の周圍を廻つて居る星の事で、我が地球も亦遊星の一つである。遊星の數は地球の外に七つしか無い。即ち左の通り。

水星　金星　火星　木星　土星　天王星　海王星

△遊星を見わける法

恒星は地球に對して、東から昇つて西に入るように見えるけれど、恒星と恒星との間においては其位置は少しも變化せぬ。然るに、遊星は、太陽の周圍を廻つて居るから、久しく見て居る中には外の星との位置が變化して來る。それから又、恒星はピカ〳〵ピカ〳〵と瞬をする樣に光つて居るが、遊星は只ジツト光つて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

居る。それて少し注意して居れば遊星を見わける事は出來る。

△宵の明星、夜明の明星

宵の明星も夜明の明星も同じ星てある。即ち金星の事てある。金星は太陽の近くを廻つて居るので、それて太陽に少し先だつて昇り、少し後れて入る場合が出來る。それて前の場合には夜明の明星と呼ばれ、後の場合には宵の明星と呼ばれるのてある。それが地球に尤も近くなつた時には、日中ても太陽の側に見える事がある。昔から「白光、日を貫く」などと云つて何か不吉の事のように騒いだのは此事てある。

△北極星を見出す法

恒星は前に云ふ通り皆東から昇つて西に入るのてあるが、其中に北極星だけは、天の北極にあるのてイツても同じ處に見えて居る。それて北極星を見つけだせば方角を知る事が出來る。山の中や海の中て道に迷つた時には北極星を便りとするより外は無い。所が其北極星がチョイと見つけだしにくい。それを見つけだすには先づ大熊宮を見つけだすに限る。大熊宮は昔し支那人が北斗七星と云つた者て、柄杓の樣な形をして居るからスグに見つけだす事が出來る。此柄杓の頭の二つの星の間に線を引いて、それをズーッと引きのばして見て行くと、丁度其見當に北極星が光つて居る。北極星の所も丁度やはり小い柄杓の形が七つの星から出來て居て、北極星は其柄杓の柄の端になつて居る。支那人は此小い柄杓を小熊宮と呼んて居る。マア今度は此位にして置かう。

妻「あなた。あなたはイツやら夫婦の間に内證があつてはいけないとおつしやいましたネ。

夫「そうさ、勿論そうさ。（と少し氣にかゝる）

妻「私……實は……一つ……ありますの。それて私、お話しなきや惡いと思つてますけれど……

夫「ドンナ事ても善いから話して御覧。（と少々不機嫌顔）

妻「實は私アノ……「内證てソウ思つてますの、……どうかしてセルの單物が一枚ほしいと、ネエあなた。。

家庭文庫

▲**平家物語**　用は無くて内に寝ころんで居る時、さりとては物を書く氣にもならず、又小むつかしき本も讀みたくなしと云ふ時、尤も多くの場合に我輩が本箱の隅から引きだして來るのは此平家物語である。平家物語の書き方は一節々々か短くてチヨツト拾ひよみするに都合も善く、それに其文章の妙が又一種格別で、云ふに云はれず愉快な所がある。琵琶に合はせて歌うたほどであるから、調子が善く、語路が善く、音讀するに尤も適して居る。飯を食ひすぎた時、何かムシヤクシヤする事のある時など、聲高々と平家物語を讀むならば、それでこそ腹は一時にすき、愁は一時に散じてしまふ。(日本文學全書第廿編、定價廿五錢、博文館)

△木曾の最期の事

木曾殿其日の裝束には、赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧きて、いかものづくりの太刀を佩き、鍬形打ちたる甲の緒をしめ……木曾三百餘騎、六千餘騎が中へ蒐け入り、竪様横様、蜘手十文字にかけ破りて、後ヘツト出てたれば、五十餘騎ばかりになりにけり。そこを破りて行く程に、土肥の二郎實平、二千餘騎にて支へたり。そこをも破りて行く程に、あそこにては四五百騎、こゝにては二三百騎、百五十騎、百騎ばかりが中を、蒐けわり蒐けわり行く程に、主從五騎にぞなりにける。五騎が中まで巴は討たれざりけり。木曾殿巴を召して、おのれは女なれば是れより疾う〳〵何地へも落ち行け、義仲は討死をせんずるなり。……義仲が最後の軍に、女を具したりなど云はれん事、口をしかるべしと宣へども、落も行かざりけるが、餘りに強う云はれ奉りて、あはれ善からう敵の出て來よかし、最後の軍して見せ奉らんとて、控へて敵を待つ所に、爰に武藏の國の住人、御田の八郎師重といふ大力の剛の者、三十騎ばかりにて出て來る。巴その中へ割りて入り、先づ御田の八郎に押し並べ、ムズと組んで引落し、我乘りたりける鞍の前輪におしつけて些とも動らかさず、首ねぢ切りて捨てゝけり。…………木曾殿は只一騎、粟津の松原へぞ蒐け給ふ。……深田ありとも知らずして、馬を颯と打ち入れたれば、馬の頭も見えざりけり。…………今井の四郎は軍しけるが、……今は誰をか庇はんとて軍をばすべき、是見給へ、東國の殿原、日本一の剛の者の自害する手本よとて、太刀のキツサキを口に含み、馬より逆に飛び落ち、貫かつてぞ亡せにける。

▲**袖珍名著文庫**　是れは今度富山房から出しはじめた叢書で、全部百冊の計劃である。我輩は特に此叢書を讀者諸君に推薦する。此叢書は我輩の謂はゆる家庭文庫に尤も適した者である。我輩が此叢書に取る所は三つの點にある。第一、材料の撰び方の善い事。卷一**芭蕉繪詞傳**(芭蕉の傳及び句集)、卷二**近松淨瑠璃理三種**、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

卷三上田秋成雨月物語、卷四曲山人娘節用、卷五源氏物語忍草、卷六今昔物語選、いづれも結構と云はねばならぬ。是れを百冊そろへるならば、日本文學の大躰を網羅する事が出來るであらう。勿論、袖珍の事ゆゑ大部の書を其儘に入れる事は出來ぬけれど、其尤も善き一部分だけを拔いて、手頃の讀本とする所に却つて又値がある。普通の讀書家には其位て丁度善いのである。第二、製本の善き事。横三寸、縦五寸、赤或は靑のクロス表紙、脊中には金文字も入れてある。是れを十冊、廿冊、五十冊、百冊と並べるならば、裝飾としても甚が宜しく、家庭に光を添へるに足る。第三、價の安き事。如何に本が善くても價の高い者ては迚も廣くは行渡らぬが、此叢書は一冊廿五錢と云ふのであるから、少し志しのある人には、月々一冊づゝを買ふのが左ほどまでの苦でもあるまい。

▲忘れがたみ（若松賤子遺著）　若松賤子とは岩本善治氏の前の夫人嘉志子の文學上の雅名てある。此人の名は「小公子」と云ふ反譯小說に依つて世に知られて居るが、此「忘れかたみ」は又更に此人の名を久しき後に留めるてあらう。此書の中には廿二篇の善き話が收められて、「離縁」「鼻で鐘」「砂糖の隱所」「着物のなる木」「けんつく圖」「女房演說」など云ふ面白げな表題が見えて居る。「小公子」と共に家庭文庫に備へらるべき値は確にある。（菊版木綴六百餘頁、定價一圓、博文館）

▲英國士道物語（加藤眠柳譯述）　是れは英國に有名なるクレーク女史のジョン、ハリフアクス、ゼントルマンと云ふ小說を譯述した者て、譯者は前號の記事にあつた「夕日岡園遊會」の主人てあります。我邦の友人の事てあるから殊々しくは申さぬが、此原書は、眞のゼントルマン（紳士）とは、身分の高下などに係はらず、只其心がけのケダカイ所にあると云ふ事を書いた者て、貧しき中から身を立てた、實に心がけの善い、潔白な、上品な、正直な少年の話てあります。製本は四六版の假綴てあるけれど、表紙は中々奇麗に出來て居る。（定價卅五錢、內外出版協會）

▲歐米名士の家庭（松浦政泰編）　此編者は女子大學の教授て、今度女學叢書の出版を思ひ立つて、其第一編として此書を出したのである。歐米名士の家庭に於ける逸話三十餘篇を收めて、又多くの挿畫を加へて居る。文章は甚だ妙と云ふほとては無いが、何にせよ家庭の讀本としては有益の者てある。製本は甚だ美麗て且つ丈夫に出來て居る。（菊判本綴二百餘頁、廣告を見よ）

●動物虐待防止會記事

▲叢書の發行　今度此會から叢書を發行する事になつて、其第一篇としては、去月下旬に

我家の犬猫

（堺枯川記）（定價十錢、郵税二錢）

と云ふのが出た。第二篇には本田增次郎氏の「犬の世界」が出る筈。又會報も近々に發行せられる筈。

▲例會　は毎月十五日午後四時より神田區一橋外學士會事務所に開かれる。幹事、評議員、其他篤志の會員がイツも大概三十人内外集まつて、會費卅五錢の頗る趣味ある晩餐を共にする。

▲殘忍なる紳士、哀れなる犬　例會の席上で或會員がコンナ話をして居つた。牛込のドコやらの立派な紳士の家で、或日、近處の野良犬に鷄を一疋取つて食はれた。すると其家では、鷄の敵討をしてやると云ふので、又其犬のやつて來た時、空氣銃か何かで物陰から狙撃をして、見事に犬の一眼を潰してしまつた。所が、

それでもマダ飽きたらずに、其後又一度狙撃をして、とうとう殘る一眼をも射潰してしまつた。それで其犬は全く盲目となつて、今では鼻ばかりを便りにして、よろぼひよろぼひ食を求めて居るが、イッソの事に打殺してやりたいほど哀れな樣になつて居るとの事。是れが人間（殊に紳士）たる者の振舞であらうか。

▲慈愛の海、仁の心　と題する大和田建樹氏の唱歌が出來た。前者は動物虐待防止の歌、後者は動植物保護勸告の歌。卷頭には樂譜も付けてある。（定價六錢、東京本郷彌生町三番地盲文社發行）

▲趣意書　御入用の方は郵券二錢由分社まで御送あれ

▲入會　御望みの方も由分社へ御申込ありて宜し。

▲徽章　はニッケル製が廿錢（郵税二錢）、銀製が五十錢（郵税四錢）、是れも由分社で取次いたします。

（但し郵券代用一割增）

▲五月雨にイッか出て居る帶の星

▲疊鰯吸ひついて居る長ッ尻

▲鼻息で近眼盆書を吹きちらし

▲下手將碁おいた飛車から湯氣が立ち

●家庭の消息（一）

梅雨中の往復（葉書）

梅雨とは申しながら隨分善く降るでは御座いませんか。毎日々々厭になつてしまひます。私方では子供は多し、家は狹し、軒にはおシメの幕を張つて居りますし、それは／＼の景色で御座います。それでも今日は花屋が善い菖蒲を持つて來ましたので、ツイ小床に突きさしましたれば、少しは家の中が明るくなつたようで御座います。是れだけは無駄口、用事はホンの一口左の通り。

アノあなたに御出入の洋服屋を私方によこして下さいませぬか、成るべくは明後日の早朝に。

十五日午後一時　くま子

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

仰せの通り善く降る事で御座います。然し私方では硝子窓の簾越しに雨中の新緑が善い景色で御座います。

洋服屋へは明後日早朝必ずお宅へ伺ふよう此葉書と仝時に申してやりました。何ぞ御新調ですか、善い御景氣ですことね。

序にチヨイとお知らせ致しますが、本郷の柴田さんでは何でも出來たらしいと云ふ事です。柴田さんがアンナお方ですから、それはモウ仰々しく御話して御座いました。然しマアそれが本當なら何より結構で御座います。左樣なら。

十五日夜　とら子

●家庭の消息（二）

目黑の會見、細君會の實行

前文略、としておいて、扨餘り御無沙汰をして居るから、此次の日曜に一家を擧つて君の内に押しかけやうかと云ふ評議もして見たが、それよりは一層の事、雙方とも出掛る事にして、目黑あたりで會見、と云ふも大ぎやうだが、一しよに飯でも食うてはドーダ。あそこの茶香園は僕が懇意だから、輕便に飯を食ふ法も考へてあるのだ。君の内でも是非一家を擧つて出かけたまへ。ドーダ、異存はあるまい。異存なぞがあつたら承知しない。そうと極れば福田、小原などにも通知しよう。さすれば自然、毎度話ばかりして居る細君會の實行も出來る譯では無いか。全體、折角の休日を家の中ばかりでジッとして暮す事は僕甚だ不快に思ふ。滊車にも乘り、歩きもする、新鮮な空氣を吸うて、喋りもする、食ひもする、それで無くては眞の休日と云ふものでは無い。など〻講釋をするにも及ばぬが、君の内の細君など餘り引込んでばかり居るからイケナイ。子供があるからと善く云ふが、子供があれば猶更の事だ、子供を家の中ばかりで育てようと思ふのが第一の間違では無いか、君。

そこで無論君の内は賛成のものとして、君等は八時三十分の四谷發の滊車で、新宿で乘換をして目黑まで出かけたまへ。僕等は九時の滊車で新橋から目黑に行く。そうすると九時半頃には目黑の停車場で落合ふ事になるだろう。福田、小原にも其時刻までに來るように云つて置く。兎に角、返事をよこしてくれたまへ。

●匆々一筆

▲三光廬主人　よりの長文の御書拜見。御推奬の段は敢て當らずてあるが、昔の小生と今の小生とを比べての御批評、眇たる我が一身に對して斯くの如く注意せらるゝ人あるかと思へば、實に悚然として恐るゝ次第てあります。最後に又、本誌第一號に對して、「エキスペクテーション(豫期)の大きかつただけに、少々拍子抜けの氣味てあるが」と云はれたは、實に小生を益するお言葉と有がたく聞取りました。猶今後の御指教を待つ。若し本名を知らせたまはゞ、昔の小生につきて猶申上たき事もあります。

▲靜岡エスケー生　よりの御書、「僕のウチて御誌を讀むのは、今は亞に母と僕とてすが、五年十年の後には、今年始めてイロハを覺えた從妹が、キット又愛讀者とも實行者ともなるてあらうと、それが爲にも御誌の万歲を祈りまする」とのお言葉、多謝々々。十年の後、君の從妹に讀まれん事は「家庭雜誌」の切に々々希望する所てあります。

▲伊藤靜泉君　より新婚の御情話、うれしく拜見。只「ハイカラ視せられし」云々の一節は注意すべき事と存じます。世俗の弊習を改めんとするには、多少の物議など固より顧みるには足らぬ事てありますが、然しながら其物議が、果して議する者の無智、無學、不見識の爲てあるか否から問題てあります。故に世の物議を受くる度每に、是れ我が行ひに足らざる所あるが爲ては無いかと、深く反省するの必要があると小生は思ふ。若し反省して疚しき所なくば、それこそ千百の物議を排しても斷行すべきてあります。猶其際深く注意すべきは自ら欺かざるの一事てあります。

●本社取次書籍目錄

▲我家の犬猫（堺枯川記）　是れは動物虐待防止會叢書の第一篇て、枯川が幼き頃より今日まで相親んだ犬猫の事を書きしるした者。畫入にて、可愛らしく、美しき本。（定價十錢、郵税二錢）

▲家庭の新風味（堺枯川著）　全六册定價一圓、本誌の讀者諸君に對しては、特に本社の志しとして、奇麗なる赤き表紙の合本として郵税なしにて差しあげます。

▲第一册　家庭の組織　▲第二册　家庭の事務
▲第三册　家庭の文學　▲第四册　家庭の親愛
▲第五册　家庭の和樂　▲第六册　家庭の教育

▲家庭夜話（堺枯川編輯）　全三册定價一圓、郵税十錢、各册卅五錢、郵税四錢、目次左の如し。

▲第一册　子孫繁昌話（堺枯川譯述）
▲第二册　質素儉約の話（加藤眠柳譯述）
▲第三册　仁慈博愛の話（志津野又郎譯述）

▲枯川隨筆（家庭文學第一篇）定價廿五錢、郵税二錢。

▲言文一致普通文（堺枯川著）　全一册、定價廿五錢、郵税二錢。

▲注意　郵券にて代價御拂込の場合は（郵税の外）一割増の事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（家庭雜誌第三號）　明治三十六年四月二日第三種郵便物認可　（每月一回二日發行）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA